

令和4年度第3回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

○日 時：令和4年10月19日（水）15:00～16:50

○場 所：仙台市役所本庁舎2階 第2委員会室

○出席委員：高浦康有委員長、佐々木綾子副委員長、石田祐委員、岩間友希委員、
加藤隆委員、佐伯恵子委員、庄子康一委員、高橋由佳委員
傳野貞雄委員、春由美委員

○欠席委員：小林幸司委員

○事務局：市民局長、市民局次長、市民活躍推進部長、市民協働推進課長、
地域政策課長、市民活動サポートセンター長、市民活動推進係長、
連携推進係長、他担当職員

○次第

1 開会

2 議事

- (1) 令和3年度協働によるまちづくりの推進に関する市の施策の実施状況について
- (2) 若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について

3 その他

4 閉会

○会議内容

1 開会

[事務局（市民活動推進係長）]

ただいまから、令和4年度第3回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。議事に入ります前に、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は、小林委員から欠席のご連絡をいただいております。現時点で11名中、10名のご出席をいただいておりまして、出席が過半数を超えておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づき、会議は成立いたします。

それではここからの議事進行は高浦委員長にお願いいたします。

[高浦委員長]

皆さん、本日もお集まりいただきありがとうございます。秋も深まって参りまして、また秋のイベントが2年3年ぶりに再開になるケースも多くて、特に仙台の秋を堪能できるような状況にやつとなってきたことで、まちの賑わいがまた出てきたら嬉しいと思っております。

それでは、ここから進行を務めます。議事録署名ですが、今回は、五十音順で加藤委員にお願いしてもよろしいでしょうか。よろしくお願ひいたします。

2 議事

(1) 令和3年度協働によるまちづくりの推進に関する市の施策の実施状況について

[高浦委員長]

それでは、議事に入らせていただきます。議事の一つ目、「令和3年度協働によるまちづくりの推進に関する市の施策の実施状況について」です。後の議事(2)の方に時間を割きたいということもありまして、かなり分厚い資料ですが、事務局からは10分ほどでご説明をいただきます。駆け足となること、あらかじめご了承いただければと思います。それでは、事務局からお願ひいたします。

[事務局（市民協働推進課長）]

本日、お時間の関係もあり、お手元の資料1の報告書に記載している一つ一つの事業のご説明には至りませんが、報告書の位置付け等の概要と、報告書全体を通しての実施状況を中心にご説明させていただきます。

この報告書は、本市の協働によるまちづくりの推進に関する施策の1年間の実施状況を取りまとめ、市議会や当委員会に報告するとともに、市民の皆様に公表することとしているものでございます。この報告書の内容がどのようなものかご理解いただくために、始めに本市の協働によるまちづくりの推進に関する施策体系について、条例、基本方針、推進プランのそれぞれの関係性や位置付けなども含めてご説明させていただきます。

本市における協働まちづくり推進に関する規定は、条例、基本方針、推進プランの三つからなっております。仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例は、本市の協働まちづくり推進に関する最上位の規定でございます。条例の第1条に、この条例の目的といたしまして「本市における協働の理念を定め、市民と市の役割を明らかにするとともに、協働によるまちづくりを推進するための基本的な事項を定めることにより、協働によるまちづくりを総合的かつ計画的に推進し、もって、豊かで活力ある地域社会を実現することを目的とする」と規定しております。次に第7条では、協働によるまちづくりの推進に関する市の基本施策を定めております。第一号、第二号、第三号と、基本施策の三つの分野を定め、それぞれの分野のもとに、イロハニと計13項目を基本施策として定めてございます。これらの3分野、13項目が本市の基本施策となっております。また、第6条では「市長は協働によるまちづくりの推進に関する施策を総合的かつ計画的に実施するため、基本方針を定めなければならない」となっており、これを受けて、仙台市協働によるまちづくりの推進のための基本方針を定めております。

続いて、基本方針をご覧ください。基本方針の2ページで、協働によるまちづくりの推進に関する

る市の基本的な考え方、3ページから5ページにかけて、先ほどの条例第7条で規定している本市の基本施策3分野13項目の具体的な内容を記載しております。そして、条例、基本方針に基づく実施計画として、本市の基本施策の3分野13項目に関する具体的な事業を体系化した施策集のような位置付けとなってございますのが、仙台市協働まちづくり推進プラン2021でございます。

続いて、推進プランをご覧ください。プランの1ページをご覧いただきますと、今ご説明した三つの規定の体系が、条例、基本方針、推進実施計画ということで、ピラミッドの形でお示ししております、推進実施計画にあたるこのプランの計画期間は令和3年度から7年度までの5年間となってございます。このプランの18ページ、19ページには事業が一覧の形で掲載されておりまして、20ページ以降には、基本施策の3分野13項目に対応する各事業の内容を掲載しております。これらの事業の市役所における実施主体は、市民局だけではなく各局区にわたる担当課が担っておりまして、これらの事業の進行管理として、実施状況を年に1度、市民協働推進課で取りまとめまして、報告書を作成しております。その報告書が、今回のお手元の資料1でございまして、令和3年度の実績を取りまとめたものになります。

それでは、資料1の表紙をめくり、裏面の目次をご覧ください。この報告書は、構成が大きく二つに分かれてございまして、一つが基本施策に関する事業、もう一つが市民協働事業という構成となっております。2ページからの基本施策に関する事業は、推進プランに掲載している各事業の令和3年度の実施状況を取りまとめたものです。また41ページ以降が市民協働事業ということで、基本施策の3分野13項目に関する事業以外にも地域団体や市民活動団体の皆様と市が連携しながら実施している事業が多くございまして、それらを取りまとめたものでございます。

2ページをご覧ください。この基本施策に関する事業は、先ほど申し上げた通り、推進プランに掲載している事業についての進行管理を行っております。再掲分を含めた合計89事業のうち、数値目標を定めている事業は59事業ございまして、計71個の目標を設定しており、一つの事業に対して、複数の目標を設定しているものもございます。これらの目標について、各担当課が達成状況を、A、B、Cの3段階で自己評価を行っており、令和3年度の全体の進捗状況を示すものが、2ページ中央のグラフでございます。66.2%が、「着実に進捗した」のA、31%が「概ね進捗した」のB、2.8%が「進捗が遅れている」のCでございました。各事業の実施状況は、3ページから40ページにかけて取りまとめており、数値目標を設定していないものについては、評価欄に「一」を引いておりまして、実施状況と点検結果のみの記載しております。令和3年度から計画期間がスタートした推進プランに基づく実績となりますので、その前の推進プランの令和2年度との実績との比較については、個々の掲載事業が異なっていたり、目標設定を見直したりしたものがあるため、単純に比較することは難しいですが、C評価となつた事業の割合で申し上げますと、令和2年度と比べて減少しております、相対的にA評価、B評価の割合が増えております。長引くコロナ禍の中でも、オンラインを活用したり、感染対策やリスク管理に工夫を凝らしながら事業に取り組み、全体としては、協働によるまちづくりが推進できたものと考えております。なお、今年度の当委員会のテーマでもございます「若者が活躍するまちづくり」の関連事業としましては、19ページの中段の下をご覧いただきたいと思います。分野3の多様な主体による活動の促進に関する事項の(1)、次の世代のまちづくりの担い手となる若者の育成として、当課の市民協働推進課の若者が活躍するまちづくり事業として、ユースチャレンジコラボプロジェクトや、仙台若者まちづくりラボ、仙台若者アワードを記載しております。そのほか、市民活動サポートセンターの実施事業や、各区役所における大学等々連携した事業、各区の中央市民センター等における事業など、若者を対象にまちづくりの担い手を育成する取り組みが23ページまで載っております。この後も本日の議事(2)でご説明します、若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査や、当委員会でのご議論なども踏まえまして、関係部署と連携を図りながら、次の世代のまちづくりの担い手となる若者の育成をさらに推し進めて参りたいと考えてございます。

続きまして、市民協働事業についてご説明いたします。41ページをご覧ください。市民協働事業では、市と町内会等の地域団体や市民活動団体などの多様な主体との協働で取り組んだ事業の実施状況を取りまとめしております。こちらは評価というよりは、実施している事業を42ページ以降にリ

ストアップしたものでございまして、全部で 278 事業を掲載しております。事業分野としましては、まちづくりの分野が過半数を超えており、続いて、子供の健全育成、社会教育、文化芸術スポーツ学術といった分野が多くなっている状況です。協働の相手方は、市民活動団体が最も多く、地域団体、教育機関等が続きます。事業数については、令和 2 年度と比較するとほぼ横ばいでございますが、コロナが拡大する前の令和元年度は 326 事業ございまして、それと比較すると約 50 事業の減少となってございます。事業の規模や内容を変更縮小したり、オンラインで代替したりと、工夫しながら令和 3 年度は事業を進めているものの、オンライン活用が難しい大人数でのイベントや、高齢者向けの施策、療養生活者の傾聴支援など配慮を要する方を対象とした事業は、再開は難しかったようでございます。

事務局からの説明は以上でございます。

[高浦委員長]

ただいまの事務局のご説明に対して、皆様からご意見ご質問がありましたら頂戴したいと思います。事業の領域が多様に広がって跨っておりますので、すぐにご意見というわけにもいかないかもしれません、いかがでしょうか。全体的なところでも個別のところでも結構ですが、C 評価をご自身でつけられる担当課というのは本当に少数だと思うのですけれども、なかなか B なのか C なのか、さじ加減みたいなところはどうしても出てくるのかと思います。私は男女共同の方の審議会の委員を務めていますが、19 ページにあります「女性の委員の登用率」は、かなり厳しくご覧になっているなという気がするのですが。或いは、コロナで開催件数が増えないというのもあったように思いますけれども、そういう外的な要因で致し方なくっていうところでも C にすべきか、或いは B にとどめるべきか。自己評価にどうしても委ねるということになると思うのですけれども、ある程度の目安みたいなものはないでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

この実施状況の ABC の各評価になりますが、各担当課の自己評価でありまして、この評価は協働まちづくり推進プラン 2021 に掲げる数値目標を踏まえて、「着実に進捗したもの」を A、目標は達成できなかったものの「概ね進捗をした」、また、予定した事業はできなかつたけれども、中身を変えて代替したり、工夫をして実施しているものにつきましても B 評価としている課もございます。目標に対して大幅に未達や事業そのものを中止したものというものが、「進捗の遅れているもの」として C 評価になっており、令和 3 年度の事業でございますと、C 評価になった事業が二つございます。一つ目が 39 ページ中段の「⑦学びのコミュニティづくり推進事業」でございまして、プランにおける目標を「事業の委託団体を毎年度 7 団体以上とする」としているのに対して、コロナの影響で委託予定だった団体の活動が休止してしまったために、目標を達成することができず、1 団体にとどまってしまったというものです。もう一つが、19 ページ中段の「③附属機関における女性委員の登用率の向上」で、目標としましては、すべての附属機関に女性委員が就任している状態にするということだったのですが、女性委員の全くいない審議会が、前年度よりも 1 件増えて 2 件になってしまった。さらに、令和 5 年度末までに、女性委員の割合を 40% 以上としてさらに向上を図るという目標に対しても、令和 3 年度末の女性委員の登用率が 35.2% となり、この二つを勘案しましても C 評価となったというものです。

[高浦委員長]

コロナのような外的要因で致し方なく、進捗が遅れるという場合もあれば、それを除けば概ね進捗したという評価もできるでしょうし、そのための評価基準は難しそうですね。どうしても自己評価にならざるをえないというところで、最初の目標設定に照らし合わせて見るということですね。だからマインドとしては、なかなかご自分で C とつけにくいこともありますが、経年で変化を見ていくっていうことに意義があるのかもしれませんね。

本当に多様な分野に跨っていると感じますが、事業費のデータも挙げていただいたりしています

けれども、事業費総額の推移みたいなものは、全体のデータとしてあるのでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

事業費の推移については、とってはおりません。

[石田委員]

この資料の中で目標が設定されていないものでも、中身を見ると実施した内容がいろいろ書かれています。3年度から7年度までずっとこのプランの指標でいくと思うのですが、今決まっているものはそのまま7年度まで同じ指標で設定を進めるのかということと、目標設定がされてないものは設定をしないままずっと7年度までいくのかについて確認させてください。

[事務局（市民協働推進課長）]

今回の推進プランは、計画期間が令和3年度から7年度でございますが、この事業の中身については、時点修正というものが必要だらうと考えてございます。例えば、その事業の中身に応じて、年度によって方向性なり中身が変わっているもの、それに応じて目標設定というのも変わっていくものもあるらうかと思っております。まだ具体的にどのような形で、いつの段階というのは決めていないところもございますが、事務局としてはそういった時点修正というものが必要だらうというふうには考えているところでございます。

[石田委員]

2点目の方の、今設定がされてないものも、中間で設定するかどうかを考えるという意味ですか。

[事務局（市民協働推進課長）]

担当課と、事業の令和7年までの方向性や予定などを踏まえて協議したうえになるかと思いますが、今目標を設定してないけれども今後設定をするという事業も今後出てくるだらうと思っております。

[石田委員]

反対に言うと、設定しなければならないというわけでもないということでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

はい。

[高浦委員長]

大学のいろいろと評価されているものと似たような構造だなと思いますね。評価される方としては大変なところもあるかと思いますが、こうやってまとめて資料をお作りいただいて、お疲れ様でございました。もう少し何かこの分野がより伸びているなど、よりビジュアル的に市民のみなさんに伝わるものがあれば、なお良いのかもしれませんね。

[佐々木副委員長]

目標設定の考え方についてですが、新しい事業を始めるときは想定したことと変わることもありますので、目標設定を柔軟に変えていくという考え方も必要なのではないかと思います。目標が決まったから何年かこれを行わなければならないとすると本来の達成したい目的からずれてしまいます。本当に意味のある事業を行っていくために目標を変えるという柔軟さがあつても、これから変化が激しく新しいものを築く時代としてはよいのではないかと思いました。

[高浦委員長]

コロナ禍でも、例えばオンラインでの取り組みを増やすとか、各担当課で柔軟に取り組まれているような軌跡もうかがえますので、柔軟さの成功ケースみたいなものを、担当課を超えて庁内で協議いただけだと、なおいいのかもしれませんね。

皆さんから本当はお一人ずつご意見をお伺いすべきかと思いますが、時間的な制約がありますので、もしご意見等ございましたら市民協働推進課の方にお伝えいただければと思っております。

(2) 若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について

[高浦委員長]

次の議事（2）に入らせていただければと思います。「若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について」でございます。アンケートの調査結果が、速報ということでおまとめいただいているものと思います。では、再び事務局からご説明お願いします。

[事務局（市民協働推進課長）]

それでは議事（2）の「若者のまちづくりの参加等に関する実態把握調査について」ご説明いたします。まずお手元の資料2をご覧ください。

前回の委員会でもご説明申し上げましたが、この実態把握調査は、若者のまちづくりへの参加等をさらに推し進めるための新たな事業展開の検討につなげることを目的に、アンケートとワークシヨップの二つの手法により実施いたします。

初めに、1の「若者のまちづくり活動に関する意識調査（Web アンケート）の実施結果について」でございます。このアンケート調査は、8月1日から1ヶ月間実施しました。実施方法は、当初予定しておりました、住民基本台帳から無作為抽出した3,000人に案内文を郵送するとともに、前回の委員会で頂戴したご意見も踏まえまして、市ホームページや市内の大学等への周知協力依頼など、郵送以外の方法でも広くご協力をお願いし、合計1,092件のご回答をいただきました。このアンケート結果をご説明いたしますので、資料3「若者のまちづくり活動に関する意識調査報告書（速報版）」をご覧ください。

まず、表紙に速報版と付記していますのは、集計分析作業に時間を要しており、分析が途中のものもございますので、その意味で速報版としております。今後、後段でご説明いたしますワークシヨップの結果なども反映した最終版を取りまとめていく予定でございます。また、ページによって選択肢の順番が異なる箇所や選択肢に番号が振られていないなど、見づらい場所、至らない部分がございまして、そちらの部分もご容赦賜れば存じます。今回のアンケートは、集計分析作業を私ども職員で行っておりまして、分析にあたり、私どもが気づいていない点もあると思っています。委員の皆様には、例えば、ここはこう読み取れるのではないかとか、こういう集計方法をとればこんな傾向がわかるのではないかなど、お気づきの点がございましたら、アドバイスを頂戴できればと存じます。

それではこの報告書の中身をご説明します。

2ページから7ページまでが、調査の概要や、回答者の基本的な属性等を記載しています。まず3ページ目をご覧ください。前回の委員会において、まちづくり活動のイメージがしづらいのではないかとのご意見を頂戴したことを踏まえまして、本調査におけるまちづくり活動について、イメージがしやすくなるよう、イラストつきでの説明を作成し、案内文やホームページ、SNS等に掲載いたしました。続いて6ページをご覧ください。この調査を知ったきっかけを伺う質問の回答結果でございます。「市役所からの郵便物」という選択肢は、住民基本台帳から無作為抽出した3,000人に郵送した案内文を想定したものでございまして、530名の回答で、郵送分の回答率は17.7%でございました。次に7ページをご覧ください。日別の回答件数の累計のグラフとなっております。まず市役所からの郵便物、つまり3,000人に送った郵送分については、案内文が8月1日に届くように郵送しまして、アンケート期間中、回答数が停滞することなく上がり続けました。対照的にインターネット・SNSの方は、8月22日に市の公式LINEアカウントからメッセージ配信を行いまし

たところ大きな反応があり、1日、2日で回答数が大幅に上りました。その他については、委員の皆様に周知やご協力をいただいたことで回答につながったものが多く含まれていると考えております。改めてご協力に感謝を申し上げます。

続いて8ページをご覧ください。これからがまちづくり活動に関する回答結果となります。

質問4と質問7で、まちづくり活動への興味関心の有無と、活動経験の有無を伺っておりまして、その回答から下の表の通り、活動層、関心層などとセグメントに分類し、以降の設問の一部では、セグメント毎の回答の分析を行っています。これまでの委員会での、若者は活動をしたがっていて、まちづくりに興味関心はあるものの、活動にまでは至っていない若者の思いを後押しすることが必要ではないかというご意見も踏まえまして、今回の調査では、まちづくりに興味関心はあるもののまた活動にまで至っていない、活動経験がない、このアンケートでいう関心層の若者をいかに活動へと後押ししていくかというポイントを見出したい、こうした集計結果を通してそのポイントを把握したいと考えてございます。9ページ、10ページをご覧ください。ここでは関心のある分野の回答結果と、10ページではこれらを年代別に集計しています。10ページの年代別の集計を見ますと、選択肢の上から三つ目の「地域活性化・まちおこし」はどの年齢層にも関心が高く、一方24歳以下では上から五つ目の「学術・文化・芸術・スポーツ」の関心が高くなっています。また、子育て中の方が多くなる30歳以上の年齢層では、選択肢の下から数えて六つ目の「子ども・青少年育成」の関心が高くなっています。その年代の方にとっても身近な分野に関心が高いという傾向があつたところでございます。

続きまして12ページをご覧ください。活動に参加する場合に期待することの回答結果でございます。回答の1位2位に、「身近な地域の役に立てる」、「社会に貢献できる」が続き、「困っている人や誰かの力になれる」という回答も4位と高いことから、「貢献」というのが、一つのキーワードになるかと思われます。前回の委員会で、ゲストスピーカーとしてお招きした大学生の千葉さんが、自分の力でも何かできることがあるというところにすごくやりがいを感じて、そこからボランティア活動に興味を持ちました、とおっしゃっていましたが、同じように考えていらっしゃる若者が多いというふうに考えてございます。また、この「貢献」に関するもの以外の回答の上位には、3位に、「人とのつながりを増やす」、5位6位に「自分の成長やキャリアアップにつながる」、「楽しい時間を過ごせる」が続いております。続いて13ページ目では、年代別の回答結果を載せておりまして、やはりどの年齢層でも選択肢の上から三つ目までに記載している「貢献」に関する回答が多く、特に18歳、19歳では「困っている人や誰かの力になれる」との回答が最も多くなっています。「貢献」に関するもの以外では、「自分の成長やキャリアアップにつながる」、「人とのつながりを増やす」、「楽しい時間を過ごせる」の回答がどの年齢層でも多く、その中でも24歳以下では「人とのつながりを増やす」との回答が特に高くなっています。続いて14ページ目は、セグメント毎の回答結果を記載しております。上から三つ目までの「貢献」に関するもの以外では、年代別と同様に自分の成長や人とのつながり、楽しい時間を期待している方が、活動層、経験層、関心層などのセグメントでも多く、特に活動層の方々では、実際の活動を通して実感されているのか、他のセグメントよりも、自分の成長、人とのつながり、楽しい時間が高くなっています。また、現在も活動に参加している活動層の方々は、人とのつながりを期待するという回答が最も高くなっています。これらの自分の成長、人とのつながり、楽しい時間の三つの期待については今後深掘りしていきたいと考えてございます。具体的にどのような成長なのかどのような学びを期待しているのかや、どういった人とのつながり、どういう楽しさなのかといった深掘りのため、市民協働推進課で実施している若者ラボなどの事業に参加した若者に対するアンケートなどを聞いてみたいというふうに考えております。また、前回の委員会でご意見を頂戴しました、若者がどうすれば参加するかといった視点でうまく活動されている団体の工夫などを先週、ヒアリングをさせていただいておりまして、本日の委員会へのご報告まで準備が整いましたが、そのあたりのポイントも生かしていければと考えているところでございます。次の設問に移りまして、15ページ、16ページはまちづくり活動に参加したきっかけ、活動への参加形態、活動を行っている人の知人の存

在についての回答結果となってございます。

次に 17 ページ、18 ページ目をご覧ください。活動に参加することへの不安、妨げについての回答結果と、18 ページではこれを年代別職業別に集計したものとなってございます。どの年代もどの職業においても、「活動時間の長さ・頻度などの時間的な負担」が最も多い結果となっております。続いて 19 ページ目は、セグメント毎の回答結果でございます。本調査のメインターゲットでございます関心層、まちづくり活動に興味関心はあるけれども経験がない方々に着目してみると、まだ活動を経験していないためか、上から三つ目四つ目の「自分に何ができるのかわからない」、「活動事例や団体などの情報がわからない」の、いわば「わからない系」の回答を選んだ方が多くなりました。また上から二つ目の「自分の他の予定が立てづらくなる」という回答も多くなってございまして、こちらも活動経験がないために、時間的な負担がイメージできない、いわば「わからない系」としてとらえることができるかと思います。ゲストスピーカーの千葉さんも、毎週 1 回の活動で強制参加ではないというところが千葉さんにとって続けやすそうだということと、無理なく、学業と両立できそうだと思えたことが、活動への参加につながったとおっしゃっておりました。これまでのアンケート結果を踏まえますと、関心層の若者を活動へと踏み出す後押しをするにあたっては、まちづくり活動に参加したときのイメージがしやすい情報、特に、活動内容の具体的な情報や活動に要する時間、スケジュール感がわかる情報を発信していくこと、そこに、前回の委員会においてもご議論ございました通り、社会、地域、人の役に立てるということとともに、自分の成長、人とのつながり、楽しい時間という期待感も備わること、そういう機会があると知ってもらうことが、このアンケート結果からも重要なポイントになるものと考えております。

20 ページ 21 ページは、活動に参加する若者が増えるために重要なことの回答結果です。21 ページをご覧ください。ここではセグメント毎に集計してございまして、特に関心層に着目しますと、上から一つ目の「事前申込なしで、短時間でも体験できる機会」、そして上から四つ目の「個人で参加できる機会」が多くなっております、先ほどの活動時間の長さ・頻度などの時間的な要素とともに、あまり気負わずに気軽に体験できるということも、関心層を後押しするポイントになるのではないかと考えてございます。

続いて、22 ページは、市役所の取り組み等を知る手段についての回答結果になります。この回答の集計に当たりまして、アンケートを知ったきっかけによって、回答に偏りが見られましたので、全体の回答を左側、そのうち案内文を郵送した方のみで集計した回答を右側に併記しておりますが、市政だよりについてはどちらの集計でも市の情報を得る手段として多い結果となっております。続いて、23 ページ、24 ページでは、それぞれ年代別に集計したものでございます、市政だよりは特に 30 代で、回答が高くなっています、おそらく子育て中の方が多い世代でもございますので、お子さんの健診や予防接種の情報などを市政だよりで確認することも多いからではないかと思われます。一方 Twitter や Instagram、Facebook 等の SNS については、他の機関の調査と概ね同様の傾向がございまして、Twitter は 29 歳より下で、Instagram は 24 歳以下に多くの若者の中でも年齢が低い層で多く利用されているという結果になりました。ただし、Facebook は、他の調査と比べても大幅に今回のアンケート結果では低いという結果となってございます。

最後の設問となる 25 ページの、自由記述の質問についてですが、194 件もの貴重なご意見を頂戴いたしまして、内容を系統立てて分析しているところでございまして、最終版の報告書に掲載したいと考えてございます。資料 3 の説明は以上となります。

続いて、ワークショップの開催についてご説明いたします。もう一度資料 2 をご覧ください。ワークショップは、11 月 30 日水曜日に仙台国際センター駅 2 階の青葉の風テラスで開催いたします。平日でもございますので、お仕事や学校帰りにご参加いただけるよう、夕方以降の時間で開催いたします。アンケートの回答結果を参考にしながら、アンケートだけでわからない若者の潜在的な意見を聞く機会として実施いたしまして、今後の事業をより効果的に展開していくためのヒントにしたいというふうに考えてございます。ご参加いただく対象者は、アンケートと同じく、18 歳から 39 歳の方でございまして、市内にお住まいまたは通勤通学している方で、まちづくり活動に取り組んで日々が浅い方や、活動に興味関心のある方、30 名程度を募集したいと考えております。参加者を六

つのグループに分けまして、グループで話し合いながら、テーマに取り組んでいただきたいと考えております。そのテーマは「マチダさんのまち活デビュー」と題しまして、架空の若者がまちづくり活動を始めるに至るまでのストーリーを考えてもらおうというものです。名前や年齢、職業など大まかな設定がある6人の主人公を市役所側で用意いたしまして、各グループで1名ずつ選んでもらいます。その主人公が、まちづくり活動を始めるに至るまでの物語、ストーリーをグループごとに考えてもらって、その結果を発表してもらおうと考えてございます。このワークショップでは、各グループが発表した内容やグループワークの過程で出た意見など、アンケート結果の深掘りにつなげるとともに、参加者にとっても、まちづくり活動へのイメージを鮮明にしていただく機会になればと考えております。また、堅苦しいものではなく、参加して楽しかったと思えるようなものにしたいと考えております。参加者の募集の際には、委員の皆様にも周知のご協力を賜りたいと考えておりますと対象者に該当するお知り合いの方がおられましたら、お声掛けなどにご協力いただけますと幸いでございます。

最後に、今後のスケジュールでございます。資料2の裏面をご覧ください。11月のワークショップの結果と、今回ご報告したアンケート結果等を合わせて、調査結果として取りまとめいたしまして、2月上旬の委員会へその内容をご報告し、本報告書を完成させまして公表したいと考えてございます。またその調査結果を踏まえた新年度の事業展開の予定につきましても、一緒にご報告したいと考えております。

議事(2)について、事務局からの説明は以上でございます。

[高浦委員長]

まち活っていう言葉ですね。それが、地域のためのみならず自分の成長にもつながるっていうのを期待している若者層が一定以上いるような、そんな印象も受けたりいたしました。ワークショップを企画されているということで、私たちもできるだけお手伝い、協力できればと思っております。3回答内容の精査ということで、例えば自由記述、これから分類されるということですけれども、定性分析のソフトで扱うとか、割と文系の研究室でも一般的になってきました。石田委員にお願いするとか、私もソフトウェアをPCに入れていますけれども、そういうものでよければ、簡単な分析をお手伝いできるかなと思っていますので、その辺りは研究者関係の委員の方で、手分けしてできればいいのかなと思っています。

[石田委員]

これから、いろんなクロス集計をされていくと思うのですが、今回特に関心層の人がまちづくりに入ってくると良いだろう、或いは経験層の人がまた戻ってきたらしいだうってことだと思うのですが。例えば、質問5のどんな分野のまちづくりに興味関心があるかについて、今、年齢で区切ってもらっていますが、ここを関心層で見てもらえたらしいのかなと思います。関心層の人たちと、活動している人たちと、もしかすると結果は一緒かもしれないですが、その辺がちょっとよくわからないので、いろんなことを集計していく中で、そこも少し見ていただけるといいかなというのが一つです。あともう一つはこの速報値で出ている文言は、そのまま最終報告に使うのかなとは思いつつ、対案があるわけではないですが、無関心層とか関心喪失層という呼び方が本当にいいのかどうか。メディアとかだとそういう名称でもいいのでしょうかけど、市役所からアンケートを回答してもらった人に、あなたは関心がないねという感じになって。だからといってじゃいいワードがあるわけではないのですが、無関心層とか、関心喪失層と今呼んでいる人たちも、19ページでは、こんなことが妨げで、こんなことがあれば参加するよという回答にもなっているように見えるところがあるので、最初の方で、関心があるかないかと聞かれたから、ないと答えたものの、妨げがなくなれば参加するかもしれないという人たちを、無関心層と切り捨ててしまうと、何か違和感があるかなと。

[高浦委員長]

確かに、そうですね。難しいですね。多少は関心を持つてもらっているかもしれない。関心期待層みたいな。ワーディングも含めてアイデアを広く頂戴できたらと思ってますが、いかがでしょう。

特に分析というわけではないですけれども、市政だよりは幅広い年代層がご覧になっていて、やはり重要なツールなのかなと思ったりします。それから、仙台市のメール配信サービスは、私も受信させてもらっていますけれども、イベントの案内が多いと思いますが、イベント参加者募集の中で、ボランティア募集みたいなものも、もう少しあってもいいのかなと思います。最近ですと、ふるさとの杜再生プロジェクトで、宮城野の蒲生地区で植樹をし、また、育樹ということで草刈もしらしょうというイベントのご案内もいただいたりしています。それほど意識せずとも自然とボランティアに入っていけるような仕掛けがもっと多くなっていけば、また草刈のみならず、そこでの散策イベントがあるとか、スタンプ集めすると協賛企業から何かもらえるとか、先程の報告書の何が重要だと思いますかという項目でも上位にありましたけれども、気軽に参加できる、体験できるような機会をぜひどんどん増やして、また告知もいただければと思います。多分ジャズフェスとか、仙クラとか、本当に仙台って街を挙げてのお祭りイベントが多いと思いますが、ボランティア募集は各実行委員会とか事務局がされていますけれども、仙台市も呼びかけを同時にしていただけると参加の機会をより多く認識してもらえるのかなと思っています。

[加藤委員]

ちょっと面白いなと思ったのが、情報のとり方という部分です。市政だよりの件が先ほどありましたけれども、若い人たちは市政だよりを見ていないというよりも若い人たちって情報を取りに来てないなど。学校や職場からの案内等に対しての反応はあるけれども、改めて自分から活動しようという意識は、この中から見受けられなかったなど。今まで何か募集してなぜ来ないのか悩んだことがありましたが、そもそも募集をしてもそれを見ていないし、情報を取りに来ていないなっていうのをこれ見て思いました。逆に、学校から案内されるとか、職場の方に案内を出してぜひ若手社員の方出してくださいといった時の方が応募者は多いのかと思います。今回、長町の方でも、広瀬川の灯篭流しがあったときに、今年は今まで以上にお手伝いの方が多かったのですね。今回は、各商店街からお店の方たちに直接案内を出したりとか、学校にも直接案内を出してみたりとか、そういったところからなのかはわからないですけれども、例年以上にボランティアの数が多くて、来場者も非常に多かったので、おかげさまで、すべて事故もなく、終えられました。人の集め方については、今まででは募集という形で出していましたけども、今回は直接声をかけたことで一気に反応が変わったという部分もありましたので、まさしくこの数字と似たような形で出ていると感じていて、関心を持って見させていただきました。そういう募集の仕方や情報の伝え方、ルートというのも、これから考えなければいけないと感じた資料がありました。またいろいろ事例が出てくれれば、お話を上げていければと思います。

[高浦委員長]

そうですね、事業者や学校、といったところとタイアップして、そこを通じて生徒、社員に伝えていく機会が増えていけばなお良さそうですね。私や石田委員が入っているゆるるの団体でも、高校生の夏ボラ体験といって、宮城県下で3日間のボランティア参加をしませんかということで、地域のNPOに受け入れ協力いただいて実施していますが、皆さん学校を通じて、教育委員会や先生も推してくれるっていうのがあると割と参加しやすいのかなというのは確かに思うところですね。

[庄子委員]

今の加藤委員のお話にもありましたけども、どういう情報ツールをきっかけに知るかという部分でも、今取り組んでいる子まもりプロジェクトというもので、中学生と高校生と大学生に防犯のポスターを募集したのですが、一つは五橋中学校の美術部さんに直接、先生にもお伝えして募集したところ、全員参加してくれたということがありました。その他は、先生方に、夏休み期間中募集し

てくださいとお渡ししてお願いして、大学もお渡ししていたのですけど、結果はすべてゼロでした。学校ではいろいろ外から来る募集を、案内を出して参加したいという生徒だけが応募する形なので、ただ情報の一つとしてチラシを渡しただけでは、思いが届かないのだと感じています。そういう面でも、やはり先生に対して、先生からその伝える生徒や学生に対しての思い入れとか、なにかそういう部分もちょっと深く入っていかないと伝わりづらいのかと感じています。あとは、先ほどのセグメントで、やはり無関心層とかの表記に関して、今無関心なだけかもしれないですが、将来的には関心を持つかもしれない、そこの表現というのは、もう少し考えた方がいいのかなと思いました。

[高浦委員長]

美術部員に協力いただき、100枚くらいでしたっけ。皆さん1人何枚も書かれたのでしょうか、防犯のポスターを。

[庄子委員]

美術部さん31名に書いていたいたもの、これを、複製して、会社などに掲示をお願いして、町中で作品展にしながら、防犯の意識を地域でも高めてもらうという取り組みをしました。

[高浦委員長]

生徒にとっても自分の作品の発表の機会にもなりますし、自己表現の場にもなります。本当にそれぞれ相乗的な効果がありそうなプロジェクトですね。中学生、高校生という話も出ましたが、社会人としての関わり方っていうことでは、プロボノに力を入れていらっしゃって、そうした機会を作っているらっしゃる佐々木委員としてはいかがですか、プロボノの若い人たちが、NPO支えてくれるかっていう点では、いかがですかプロボノ募集については口コミで広がっていくという感じでしょうか。

[佐々木副委員長]

私たちの団体にも学生がたくさんいらっしゃいますが、検索するとゆるるの広報が、上位に出てきて、そこから参加される方が多いようです。最近は、私たちの団体のサイトの方でもSEO対策をしているので、そこから参加してくださることも多いです。今のご質問と文脈がずれるかもしれないけれども、例えば、無関心層から関心層、関心層から活動層へと上がるにはステップがあると思いますので、そのステップを上がりやすい各施策が必要かと思います。例えば、STORIAは、ウェブサイトでの募集をしている中で、AISAS^{*}という、認知してもらい、興味を持ってもらう、検索してもらう、そして問い合わせをいただくというようなステップを作っています。その認知の一つとして、ゆるるのサイトがあります。そういう段階を作ることが必要かと感じました。後は、やはり活動した方々の声はすごく影響が大きく、背中を押すことにも繋がりますのでそういう体験した声を届けたい層が使う媒体で広報していくこともあります。

* AISAS (アイサス) …Attention (認知) · Interest (興味関心) · Search (検索) · Action (行動) · Share (共有) の頭文字を組み合わせて作られた、電通が商標登録した用語。消費者が商品を認知してから購入するまでのモデル。

[高浦委員長]

活動した人の声をこれから活動しようと思っている人に伝える、その伝え方はWeb上で声を上げるといった感じでしょうか。

[佐々木副委員長]

はい、そうです。その段階の中で、もう少し知りたいという興味関心がある人のために説明会を開いておりまして、当方の団体が申込者のニーズ提供ができるかどうか確認する場であり、また、ボランティアを行う上の不安をお聞きし、心配を解消しながら申し込んでいただくという形で、丁寧にやっています。直接お会いすると団体の雰囲気など感じいただけますので、自分に合うか

どうか決められることが安心感にも繋がりますね。

[高浦委員長]

そうですよね。いろんな不安を抱えて、自分が果たして組織になじめるだろうか、役に立つだろうかと思っている人たちの背中をそっと押してあげるというところで、説明会のリアルな場も大事だということですね。

[高橋委員]

最近、高校生の居場所支援事業というものを石巻でお手伝いしていますけれども、例えば自分が共感できるっていうテーマだと結構皆さん集まってくれると感じています。例えば、高校生の若者がなかなか洋服を買えない生活困窮の世帯の人のために洋服を集めていますというと、20代ぐらいの学校を卒業したばかりとか大学生の人たちが、すごくたくさん提供してくれたり、じゃあ私たちも参加しますよって言ってくれたりとか。本当に自分が共感できる身近なテーマがあると、皆さんアクションを起こすということがわかりました。農業の分野でも、ただ農業のボランティア募集って言っても参加していただけないのですけれども、例えば高齢の農家さんが困っています、稲刈りの作業をみんなで何人募集しますとか、お昼を出しますとか、こう困っているので助けて欲しいみたいなメッセージが具体的な情報で、入っていると、結構皆さんその情報を拾ってくれるようです。

情報というところでお話すると、先ほど加藤委員もおっしゃったように受け身の方が多くて、自分から情報を探そうとかアクションを起こそうという若い人はやはりすごく少ないので全体的に感じています。「まち活」というキーワードを作ったら、そのコンテンツをなにか上手く活用して、できるだけまとめて発信できるようなものがあつたらいいのと思っています。キャッチャーな言葉ってすごくみんな若い人って響くので、ちょっとボランティアとずれますが、最近「おてつたび*」という名前で、地域でお手伝いしながら地方の暮らしを楽しむとかいうのがあって、若い人がそのキーワードで関心を寄せてきてくれたりします。ふるさとワーキングホリデーとともに9月から石巻市も始まりましたが、学生や若い層の人がとてもアクセスしてくれます。やはりそういうキャッチャーな言葉にはすごく響くのだなというのがわかったので、そういったことも工夫されたといいのかなと思いました。

* 「おてつたび」は株式会社おてつたびの登録商標です。

[高浦委員長]

キャッチャーな言葉の背景に、自分も楽しめそうだなという旅行感覚も味わえて、そういった楽しみをどうくっつけてくかっていうところですね。例えば、さっきの高齢の方が困っていますというのを発信する際のツールはSNSでしょうか。

[高橋委員]

そうですね、SNSが多くて、いろいろなSNSの中ではやはりTwitterは一番反応が多いですね。一番広げやすいのはTwitterなのかと個人的には感じています。

[高浦委員長]

TwitterとかInstagramというところでしようかね。うちの学生の就活をしている方に聞いても、Instagramでインフルエンサーの人がいて、この会社は一押しですよという、そういう情報で自分の行きたい会社を決めているそうです。そんな時代なんだなと思いました。SNSで就活するというのを聞いて、結構びっくりましたが。だから、自分から主体的に取りに行くというよりは、多少ちょっと流されるものもあると思うんですけども、こういう情報を面白いね、いいねってことで、ある程度飛びついでいくという若者行動も見越していく方がいいのかなと思いました。また、共感するというところは、今の世代、本当に大事にしているところがあると思いますので、そういうと

ころも意識した呼びかけ方ということですね。

[岩間委員]

この速報のアンケート結果は、私が日頃学生と接している時に感じる印象と概ね違いがないかという印象を受けたので、まずこういった結果が公のこういった場できちんと議場に挙げられて分析されているということ自体に意義があると感じました。私が気になったのは、全体の3%に届かないぐらいなのでそんなに深掘らなくてもいいのかと思ったのですけど、関心喪失層です。こちらは、経験してみたけどやっぱりやめたという層ですね。19ページのこのセグメントの妨げの理由を見ると、やはりほとんど時間的負担が思ったよりもあったということが見える回答結果だと思いました。なので、短期的にはこの委員会の目的である「参画を促す」、まずは「短時間でいいから機会提供して参加してもらう」でOKだと思いますが、より長期的にはせっかく参加してくださった方が、関わっているうちに嫌にならない仕組みづくりみたいなものをしていった方がいいのではないかと思います。方針に加える等しておいた方が、ただ機会提供して終わりということにはならないのではないかと感じました。

[高浦委員長]

長期ですね。定着いただけだと、NPO団体などまちづくりに関わる団体にとっても大変ありがたいことですね。定着まで持っていく、何か工夫がさらにありそうですか。

[岩間委員]

今回アンケートを取った人が39歳までで、若いとはいえ幅広い年齢ですので、10代20代30代で変わってくるような気がしています。金銭的メリットじゃなくてもよくて、自分にとっての経験でもいいですけれども、メリットあるよということを、年代別に分けて発信するというのもあります。

あと、情報発信の件については、まちスポでもすごくそう思いますが、公的機関、学校等に情報発信の連携をすると、自分たちで頑張ってチラシ作ってまくよりも圧倒的に刺さりが違います。一方で、学校のただでさえ忙しい先生に情報発信してくださいというのが、例えば今だったらそのルートを知っている1団体からなでつき合ってくれますが、それに紐づいている10団体20団体が私も我もとなれば、またそれが悪い循環になってしまふ。忙しいのに、紙を増やさないでくださいって。多分それは、町内会の回覧版の問題でも起きていることがありますので。公的な力を借りるのはすごく大事ですが、その人たちもそんなに無理なくできるような仕組みがあると、きっと先生方も町内会の役員も楽なんじゃないかなと思います。

[高浦委員長]

学校の方も今SDGs教育などに、熱心に取り組むようになってきているので、その一環でまちづくりというところも視野にいろいろなメニューがあって選択できるとかといったふうに持つていけるといいのでしょうか。なかなか先生方も片手間にはできないことだと思うので大変かもしれません。比較的、大学ですといろいろなプロジェクトを走らせることができるのかと思います。研究室単位とかでもあったりすると思います。仙台朝市でも、確か宮城学院女子大学の学生が関わって、このお店にはこんなおいしいものがありますよとか、イラストを書いたりSNSで情報発信したり、そんな関わりをされていますよね。学校の一つの新プログラムみたいなことになっていくと、組織としても関わりやすいのかと思います。

[佐伯委員]

周知の工夫がよかったからかなということで、より多くの回答があったっていうことはよかったのではないかと思いました。それから、市政だよりの有効性っていうのは、随分びっくりしました。若い方でも見ているというのはちょっと驚きましたけれども、やはり毎月配られているのは何気な

くても見ているのということだと思うので、その中で例えば募集ってことじゃなくて、「まち活」という言葉をすごく新鮮に思ったのですけれども、そういう言葉を発信していくことで、なんだろうという興味を引くのではないかというふうに思いました。

それと、20ページの若者が増えるために重要なことの「その他」の中で、小中学校、高等学校への出前講座という言葉があったのですけれども、1回目の委員会でも、小さいときからまちづくりに関心を持つような機会があつたらいいのではないかと話しましたけれども、この出前講座というのは、まちづくりに興味を持つ第一歩なので、学校に募集をするっていうことじゃなくって、総合授業とか何かの形で、市の方から出向きますよというPRをしていただいて、もっと低年齢の方からまちづくりに興味を持つてもらうということも、だんだん若者が増えるために重要なことではないのかなと思いました。私の場合はアナログ人間なので、チラシを見ていろいろ参加することが多いですけれども、そういうのがどこにあるかさえもわからない。例えば、市民センターに行けばいろいろなそういうものがあるとか、そういうことさえも多分わからないと思うので、例えば市政だよりのどこかに、そういう情報はこういうところに行くとありますよとか、サポセンにありますよとか、NPO プラザでいろんなものもやってますよと、まち活コーナーみたいな項目を作っていただいて、そこで定期的にPRするっていうのも、長い目で見たら、有効なのではないかというふうに思いました。

[高浦委員長]

具体的なご提案をいただいて、活性化するような、柔軟なご意見ですね。まち活コーナー、ぜひ作っていただきたいですね。また、低年齢からということですね。先程来も18歳以前のところからの話も一部入っておりましたけれども、若者になる一歩手前辺りから、よりボランティアやまちづくりに関わる機会をいかに増やしていくのか。その一つの方法として、出前講座の話だと思います。

まち活という言葉は、事務局で作られたのでしょうか。もともとあったのでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

最近、婚活とか就活等のワードはキャッチャーだと思いまして、あればまち活というのも伝わりやすいのではないかと考えてございます。また、今回のワークショップでは、「アンダー39」ということで通常我々ですと「若者」と言ってしまいますが、課内で検討した時に、対象としている方に引っかかるのではないかということもありまして、いろいろ検討した中でスポーツ感とか楽しいといったイメージが感じられるのではないかということで、「アンダー39」といたしました。また、題名も「マチダさんのまち活デビュー」ということで、今、ご議論いただきましたキャッチャーというところについては、こちらでも気にしていただいたところでございます。

今いろいろご意見いただいた中で、分析と同時に並行しながら来年度の予算要求を行っているのですが、今我々が考えていることもご紹介したいというふうに思ってございます。まず、関心のある方々を活動に引き寄せたい、後押ししたいというときに、今回のアンケート結果とこれまでのご議論を踏まえて、その時間的な負担、要はその短期的なプロジェクト感なのか。役所ですと往々にしてその時間的にも長いものとか、どうしてもそこに成果というか熟度を求めてしまうものことがあるのですが、逆にそういったものは若者にとっては負担感を覚えてしまうので、もう少し気軽に短期間で、自分のスケジュールを立てやすいものが必要だと思っております。例えば、気軽に市民活動が体験できるブースなどを、1日、人通りの多い中心部に設けて、若者たちに一部企画をお願いして、普段なかなか若者が情報を取りにこないという部分があるのであれば、町中に買い物に行かれる若者も多いと思いますので、そこでなにか少し面白いことを経験してもらえば、実は大きな一步ではないかと考えております。そういうものができればいいなということで、予算要求も頑張りたいなと思っていますところでございました。他にも、私共の若者ラボという事業で、若者がグループで、ワークショップやフィールドワークを通して、まちづくりのアクションプランを発表するというのですが、やはり役所の事業ですので年度ごとで切れてしまつて、前の年度その前の年度の卒業生というか、ラボを経験された方が100名を超えるというところがあって、そういう

た方々との交流の機会というものもあってもいいのではないかと思っています。今回の調査では、人とのつながりを増やしたいとの期待感があり、人とのつながりというのは同世代なのか、もしくは大人世代なのか、普段の生活では接することない人なのか、バックグラウンドが違う方と接することを期待しているのか、といったところを深掘りしたいと考えています。そういう中で、やはり、違う年代層の方々と触れたいということがきっと多いだろうと予想しております、そういう交流の機会の場というのも設けられればというふうに思っているところでございます。

また、先ほど時間的なスケジュールのたてにくさというところがありました、若者ラボでは、自分なりのグループなりのアクションプランを発表した後というところで、前回の委員会でもご意見ありがとうございましたが、インセンティブではないですけれども、少し後押しできたらいいかと思っています。そうしたときに、若者版の市民協働事業提案制度というものがございました、これは30万円を上限に仙台市で100%負担して仙台市と一緒に協働しましょうというものでございます。その事業ですが、実は若者ラボが12月で終わり、年度を跨いで4月から公募という状況だったので、これを、今年度は、若者ラボが終わった後、時間を空けないですぐ公募を始められないかと思っています。そのように公募を打ち出すことによって、参加した若者が自分たちのスケジュールを組みやすいようにする工夫もしたいと思っています。あと、情報の伝達の部分もございましたが、今回の若者版の市民協働事業提案制度ですが、昨年度は前段の資料1の実施状況報告書でも目標3件としたところを2件だけだったので、B評価という状況になってしましましたが、今年度は6件の事業を実施いたしました。そこで工夫した点をみると、やはりその情報伝達の部分で工夫をしたところがございました、今年度は、SNSを使った広報というところのほかに、過去に若者ラボや若者アワードに団体に参加していた若者たちから、若者同士の横のつながりで事業を紹介していただいたところ、結果6件の事業の実施ということで、昨年と比べると3倍となりました。こうした若者間のネットワークというものを生かした広報というのが、やはりキーになるのだろうと思っているところでございます。これから予算要求というところで、不確定な部分もありますが、今の当課の考え方とか、課題認識を少しご説明させていただきました。加えて、予算に絡まなくても、既存の事業の中でも工夫できることがあると考えております。例えば、繰り返しになりますが、我々の広報も、若者ラボですと、実施内容だけではなくて、結果までの過程の中で参加した若い方々がどういう思いを持ったのか、どういうふうに思いが変わっていたのかというところをうまく拾って、次年度の広報で使うといいのではないかと思っています。端的に言うと、先輩参加者から後輩参加者に何を伝えたいかといった、パワーワードというか、PRワードなども、アンケートなりで調査しております、同じ世代の参加した若者の生の声を広報にも載せてあげるっていうのは、効果があるのではないかとか、私どもはどうしてもその結果だけ見てしまうのですが、結果だけではなくその過程で、若者の意識がどう変わっていたのかっていうのを、うまく広報の部分でも押し出していけば、若者にキャッチされることになるのではないかなと思っています。順序がちょっとバラバラになってしまった説明になっておりますが、今このようなことを考えているというところでございます。

[高浦委員長]

事務局も非常に若々しい柔軟な発想でいろいろなご提案いただいているので、きっと一緒にやろうというユースの世代も増えてきたと思います。同世代で、また先輩後輩のつながりを活用して、顔の見える関係交流の場を作っていくかれるという話であったかと思います。

仙台青年会議所の方でSDGs ウィークとかされたりして、それこそアンケートで、こういうまち活性コーナーみたいなものがリアルにもできれば面白いなと思いますし、商店街の皆さんも多分協力的かなというふうに思います。「まち活」が流行語大賞になれば、ぜひ表彰を受けられたらしいかなと思います。本当は、私たちの推しのまちスポットみたいなものを見つけようみたいなものがあつてもいいのかもしれませんね。

[春委員]

実態調査の結果について、自分の事業の方と照らし合わせて、皆さんのお話を伺わせていただい

ていたところです。学生、教育委員会も通じて、学校も通じてうちも案内を出したり、大学もパートナーシップ契約を結ばせていただいて、それぞれダイレクトでお願いをしますが、学校によって温度差というか、その事業に対して、これだからヒットするというわけではなく、それぞれ反応するところが違うと感じています。今まで企業は企業、学生は学生、と分けて事業を開催していたのですが、今年度は一緒にできるものはご案内と一緒にさせていただくという形を、取らせていただいているところがあります。その中で、SDGs のゲームを使った形で、SDGs を本当に企業さん皆さん自覚してやられていますかというところも含めて企業セミナーさせていただいたときに、学生さんも一緒に参加していただきました。その際、先ほど人とのつながりを増やせればというお話をありました。学生に直接伺ったところ、普段、企業の方々とお話する機会がないので、非常に新鮮でいい機会を得られたというようなところとか、企業においては、学生の方が SDGs については詳しいので何となく言葉は知っているけれども具体的に自分のところに置き換えたときに何をしていいかわからなかったというようなところで、少しハードルが下がったようなお話を伺えたということがあったので、異世代というか、割と企業って言っても、年配の人よりは若い方がいらっしゃるという視点では、つながりやすいのかなと思いました。今まで講座で知識を企業に伝えるとか、事例を教えて欲しいというようなところを重点に事業を展開していたのですが、全然前に進まないということに気づき、今回ごみ拾い活動交流会というイベントの募集をしました。普段のセミナーの案内はほぼ回答がないのですが、3人1組でグループにしたところ非常に反応があつて、アンケートの回収率も100%で、なおかつ、次回も参加しますかといったときに、ほぼ全企業が参加しますと言ってくださったり、アンケートの中に何で知りましたかって言ったときに、知人からっていうような回答で、そういう何か具体的なもので、それも8時半から10時までで終わるっていう企画なので、そのまま仕事に行かれる方もいらっしゃり、短い時間で具体的にするっていうのは非常にいいのかなと、今回そこから発展して自分のところでやってくれればありがたいなっていうふうには思っています。ちょっととゲーム感覚なので、盛り上がれる、楽しんでできるっていうようなところと、その企業の参加の中も若い方々が多いので、多分30代ぐらいまでの方々が多く参加していただいているというところもいいのかなと思っているところです。その時に一番驚いたのが、申し込みの参加の時に、証明書が出るか、企業の方に聞かれました。学生だけじゃないんだと思って。最初は無関心だけれども、それをきっかけに次回もまた参加したいというのは、多分楽しかったっていう意見が多かったので、そういうところから関心層につながり、広がりが見せられるのかな、なんていうのを、報告を見ながら気づかせていただいたなと思ったところです。あと学生向けには今回、第1と第3の土曜日、10時から3時、昼休みの12時から1時間休憩がないなら、いつでも来ていいので、届け出ボランティア活動をしませんかという案内を出しています。必ず、結構多くの方がいらっしゃって、もちろん証明書を出すのですけども、そういう活動だと自分の予定が立てやすく、特に予約がいらない、短時間で帰れる、これが多分ヒットの一因だと思います。活動内容は、対象者にお手紙を書いていただくもので、そのお手紙にはがきを同封するので、お返事がくるといったものです。若者とその外の関連の方々にも協力いただきながら実施しています。今コロナで発表の場がない学生さんが非常に多くて、施設とオンラインでつないで言葉を交わしながら発表する機会を設けると、終わった後に、3年間どこも発表できなかつたのにと喜んで泣いてしまった学生さんもいるというようなこともあります。そういうところでボランティア活動が成立するのも一つかと思いました。関心がないかあるかというより、これをやったらボランティアとかまち活になるという意識がない方々もいらっしゃると思うので、興味があるところからのツールというか、ボランティアしましようっていうとなかなか高尚に感じてしまうので、そこまで思ってなくても取り組みやすい提案というものがあるといいと思います。

他にもボランティア活動として、同じ学校の3年生と4年生のダンスの製作をお願いしそれぞれに YouTube に、アップしています。そうすると、学年で対抗して、YouTube の再生回数が何回増えたかを競い合っているらしく、それで皆さん力が入り、率先してそのダンスを教えに行きますよと言つてくださるので、何かきっかけを作るようなツールを用意してあげると、継続的に意欲的に取り組めるかと思ったところです。このアンケートの結果を自分の事業に置き換えて、どうしたらいい

いか考るうえで参考になったので、この後のまとめも非常に楽しみにさせていただいております。

[高浦委員長]

いろんなゲーム感覚で楽しめる様子を入れていくというところですね。ごみ拾いの交流活動についても、ゲーム的な要素を入れられたのでしょうか。

[春委員]

3人1組で、歩数とごみの量を競い合って、歩数とごみの量の合計、歩数だけ、ごみの量だけの3つの部門で、優勝、準優勝、3位を決めました。ごみを集めないで歩数だけ頑張つくるチームもあったぐらいです。

[高浦委員長]

スマホのアプリとかを使ったのでしょうか。

[春委員]

万歩計か、携帯の万歩計の始めと終わりを書いていただきて、算出してもらいました。景品つきです。

[高浦委員長]

至れり尽くせりですね。

[春委員]

YouTubeにダンスもアップしていますし、ごみ拾いの様子もアップしておりますので一度、ご覧いただければと思います。再生回数は、勝手に伸びましたね。やっぱり自分が映っていたりすると、皆さん興味を持っていただけて。普段のフェイスブックや、ツイッターは全然反応ないですよ。やはり、ただ報告じゃなく様子が載っていると再生回数が上がるんだと思いながら、見させていただきました。

[高浦委員長]

それも一つの自己表現の機会になりますよね。いろんな工夫をされてらっしゃるのですね。ぜひ見たいと思います。

[傅野委員]

町内会は市民の日常の安全に力を尽くして、今一番注力しているのは特殊詐欺、それと、防災です。若い方と接する機会が少ないのでここに来るのは私でいいのかなという思いがありますけど、ただ、やはり今までの話を聞いて、このアンケートの報告書は素晴らしいものだと思います。12ページを見ても、身近な地域の役に立っているという割合が53.6%もあり、皆考えていただいているのだなということを、再確認できました。これは本当に結構な数字かなというふうに思います。それと、我々、毎月配付している市政だよりが読まれているということも非常に安心をしています。市政だよりは、あまり見られていないだろうと思っておりましたので、アンケートの結果を見て、我々は反省するところです。佐伯さんのお話にありました、アナログをデジタル化、それにはどのようにしたらいいかと。災害時、無線を使うとかいろいろなことを考えてやってきたんですが、今はやはり、スマホのSNSです。すぐ一齊に集まります。だから避難所開設は、それを頼りにやっていますし、今はパソコンをみんな抱えながら、市避難集会所と本部避難所の運営を画面で見ながらやっていまして、それをさらに広げようというところまでできています。今日いろいろお話を聞けて、大変勉強になりました。今日の報告書と、皆さんのご意見を参考にさせていただきたいと思います。

[高浦委員長]

ユース世代も身近な地域の役に立ちたいという思いがあれば、町内会活動ともどこかでつながっていくところがあるかと思います。特殊詐欺に高齢者の方があわないように、自分たち世代はどういう声かけができるだろうかとか、60歳以上とそれ以下といった異世代の交流が広がっていくといいますね。また避難所でも、運営でもSNSが活用されているということで、デジタル機器に慣れているユース世代がますます活躍できる場ではないかと思いますので、そういうところで力を生かしていく気は確かにいたしますね。

ボランティアに参加するというところから進んで、先ほどの事務局からの説明にありましたけども、若者版の市民協働提案制度で、資金を使って、自分たちの活動を継続していく団体を立ち上げるというところになっていきますと、社会起業家ということになるかと思いますので、起業家のまちを目指す仙台市の方向性ともぴったりくるかと思いました。

ますます議論したいところであります。この議題については以上で、一旦、お開きとさせていただいて、またもしいろいろなご意見がおありでしたら、多少この後残って、担当課の方にお伝えいただければというふうに思っております。

次、最後ですけれども、次第3「その他」になります。

事務局からは特段ないということでございましたが、委員の皆様の方から、何か共有すべきような情報はございませんでしょうか。特になければ以上で本日の協議事項報告事項終了としていただきます。ありがとうございました。進行を事務局にお返しいたします。

[事務局（市民活動推進係長）]

高浦委員長、ありがとうございました。

以上をもちまして、令和4年度第3回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。次回は2月の上旬に開催を予定してございます。

本日はお疲れ様でございました。一了

〈議事録署名人〉

[委員長]

高浦 康有

[署名人]

加藤 隆